

一般社団法人日本沖縄政策研究フォーラム

日本民族分断阻止! 歴史戦セミナー

# 日本民族の統一史としての沖縄史

第2回: 近代国家編

## 「沖縄県設置と近代国家日本の統一」

令和元年

8月27日(火)

昼の部14:00～ 夜の部18:30～

3F 男女平等推進センター 研修室2

◎会場分担金+資料代=1,500円

◎場所: IKE●BiZ としま産業振興プラザ  
(旧勤労福祉会館)

一般社団法人日本沖縄政策研究フォーラム

理事長 仲村覚



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 覚  
2019/8/26

沖縄の人々を先住民族とする  
国連勧告撤回の陳情書を採択した市区町村議会

| No. | 日付        | 細工区分 | 採択した市区町村議会     | 人口      | 小計      | 合計      |
|-----|-----------|------|----------------|---------|---------|---------|
| 1   | R1.7.8    | 趣旨採択 | 長崎県五島市議会       | 36,814  | 466,376 | 593,790 |
| 2   | R1.7.4    | 採択   | 鳥取県倉吉市議会       | 46,918  |         |         |
| 3   | R1.7.4    | 採択   | 高知県幡多郡黒潮町議会    | 11,134  |         |         |
| 4   | R1.7.3    | 採択   | 北海道小樽市議会       | 115,333 |         |         |
| 5   | R1.6.28   | 採択   | 東京都清瀬市議会       | 74,721  |         |         |
| 6   | R1.6.26   | 採択   | 滋賀県東近江市議会      | 44,469  |         |         |
| 7   | R1.6.24   | 採択   | 兵庫県高砂市議会       | 90,734  |         |         |
| 8   | R1.6.21   | 採択   | 福岡県田川郡糸田町議会    | 9,194   |         |         |
| 9   | R1.6.21   | 趣旨採択 | 長野県木曽郡木曽村議会    | 11,415  |         |         |
| 10  | R1.6.21   | 採択   | 福島県岩瀬郡 鏡石町議会   | 12,312  |         |         |
| 11  | R1.6.19   | 採択   | 秋田県藤里町議会       | 3,214   |         |         |
| 12  | R1.6.14   | 採択   | 青森県下北郡大間町議会    | 5,266   |         |         |
| 13  | R1.6.13   | 趣旨採択 | 福島県耶麻郡北塩原村議会   | 2,729   |         |         |
| 14  | R1.6.13   | 採択   | 秋田県北秋田郡上小阿仁村議会 | 2,123   |         |         |
| 15  | H31.3.14  | 採択   | 沖縄県本部町         | 13,200  | 127,414 |         |
| 16  | H28.6.20  | 採択   | 沖縄県石垣市         | 49,686  |         |         |
| 17  | H27.12.22 | 採択   | 沖縄県豊見城市        | 64,528  |         |         |

滋賀東近江市議会本会議令和元年6月26日





# 国連勧告と 琉球・沖縄の人々の権利とは

公正な社会を考えよう



長年、沖縄を悩ませてきた米軍基地問題。私たちは、どの  
ように向き合えばよいのでしょうか。

2015年9月に国連人権理事会に出席した故翁長雄志知  
事は、沖縄の基地の問題が人権の問題だと国際社会にア  
ピールしました。また、国連人種差別撤廃委員会は2018年  
9月、琉球・沖縄の人々の権利を保護するよう日本政府に  
勧告を出しています。世界各地でマイノリティ居住区に軍  
事基地が集中する傾向があることから、国際的な人権保  
障の中で先住民の権利が認められるようになり、沖縄の  
ことも広く理解されるようになったのです。

ところが、日本国内では国連勧告撤回を求める陳情が全  
国の地方議会に出され、中には採択されてしまった議会も  
あります。  
日本が琉球・沖縄の人々の権利を認めないのは、  
一体なぜなのでしょう。この問題の真相に迫ります。



2019年

9月21日(土)

14時～16時30分  
(13:30開場)

場所:小金井市市民会館 朝え木ホール

(JR武蔵小金井駅南口徒歩7分  
小金井市駒原町3-33-25 小金  
井市商工会館3F)

資料代  
500円

## 報告 1



「国連人権機関勧告の意義  
と『意見書』の時代錯誤性～  
アイヌ民族の事例と故翁長  
雄志前知事の画期的行動」

▶上村英明さん  
(恵泉女学園大学教授)

## 報告 2



「先住民民族論とは何か」

▶観川志奈子さん  
(沖縄大学非常勤講師。研究テー  
マは言語復興、脱植民地化。国連  
先住民会議に参加)

## 報告 3



「国連勧告撤回意見書の  
都内の採択状況」

▶米須清真さん  
(沖縄出身。小金井市民。  
小金井市議会意見書のベースと  
なる陳情書を提出)

主催・問い合わせ:

OKINAWA-KOGANEI

(沖縄の基地問題を考える小金井の会)  
tel:090-2460-9303

後援:小金井市教育委員会

協力:市民自治をめざす三多摩議員ネット/  
小金井平和ネット/市民外交センター/辺野  
古問題を考える小平市民の会



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

# 一斉抗議行動のお願い

## 沖縄の人々を先住民族とするイベントの後援をする小金井市教育委員会

**国連勧告と琉球・沖縄の人々の権利とは**

公正な社会を考えよう

長年、沖縄を留めてきた米軍基地問題。私たちは、どのように向き合えばよいのでしょうか。

2015年9月に国連人権理事会に出席した故翁長雄志前知事は、沖縄の基地の問題が人権の問題だと国際社会にアピールしました。また、国連人種差別撤廃委員会は2018年9月、琉球・沖縄の人々の権利を保護するよう日本政府に勧告を出しています。世界各地でマイノリティ居住区に軍事基地が集中する傾向があることから、国際的な人権保障の中で先住民族の権利が認められるようになり、沖縄のことも広く理解されるようになったのです。

ところが、日本国内では国連勧告撤回を求める陳情が全国の地方議会に出され、中には採択されてしまった議会もあります。日本が琉球・沖縄の人々の権利を認めないのは、一体なぜなのでしょう。この問題の真相に迫ります。

**2019年 9月21日(土)**  
**14時～16時30分**  
(13:30開場)

報告1 「国連人権機関勧告の意義と『意見書』の時代錯誤性～アイヌ民族の事例と故翁長雄志前知事の歴史的行動」  
・上村英明さん  
(恵泉女子大学教授)

報告2 「先住民族論とは何か」  
・銀川志奈子さん  
(沖縄大学非常勤講師、研究テーマは言語復興、脱植民地化、国連先住民族会議に参加)

報告3 「国連勧告撤回意見書の都内の採択状況」  
・米須清真さん  
(沖縄出身、小金井市民、小金井市議会意見書のベースとなる陳情書を提出)

主催・問い合わせ:  
OKINAWA-KOGANEI  
(沖縄の基地問題を考える小金井の会)  
tel:090-2460-9303

後援: 小金井市教育委員会  
協力: 市民自治をめざす三多摩議員ネット、小金井平和ネット、市民外交センター、辺野古問題を考える小平市民の会

2015年9月に国連人権理事会に出席した故翁長雄志前知事は、沖縄の基地の問題が人権の問題だと国際社会にアピールしました。また、国連人種差別撤廃委員会は2018年9月、琉球・沖縄の人々の権利を保護するよう日本政府に勧告を出しています。世界各地でマイノリティ居住区に軍事基地が集中する傾向があることから、国際的な人権保障の中で先住民族の権利が認められるようになり、沖縄のことも広く理解されるようになったのです。

ところが、日本国内では国連勧告撤回を求める陳情が全国の地方議会に出され、中には採択されてしまった議会もあります。

日本が琉球・沖縄の人々の権利を認めないのは、一体なぜなのでしょう。この問題の真相に迫ります。

主催・問い合わせ:  
OKINAWA-KOGANEI  
(沖縄の基地問題を考える小金井の会)  
tel:090-2460-9303

後援: 小金井市教育委員会

協力: 市民自治をめざす三多摩議員ネット、小金井平和ネット、市民外交センター、辺野古問題を考える小平市民の会

小金井市教育委員会は、「沖縄の人々を先住民族とする」国連勧告を政府に認めさせようという集会の後援をしています。この後援の取り消しを求めるべく、多くの皆様の抗議の声を挙げていただくとお願い致します。



抗議先

◎小金井市教育委員会 生涯学習課

◎TEL: 042-387-9879

◎Mail: k020199@koganei-shi.jp



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

# 国連先住民族勧告の撤回の陳情・請願運動を全国展開する目的

- ① 沖縄分断工作が取り返しのつかない事態になる前にその存在と実態を地方の政治家に知ってもらうこと。
- ② 採択することにより、沖縄と本土の絆が強まり民族の一体感が増すこと。
- ③ 地方自治体からの意見書で世論をつくり政府を国連に対して本気で動かすことです。
- ④ 沖縄の人々が先住民族だという社会通念は日本には全く無いということを国連や世界各国に示すこと。
- ⑤ 全国で意見書が採択されたら、マスコミが無視できなくなり、全国民が知ることになると、沖縄の人たちが左翼に利用されていたことに気がつくということ。



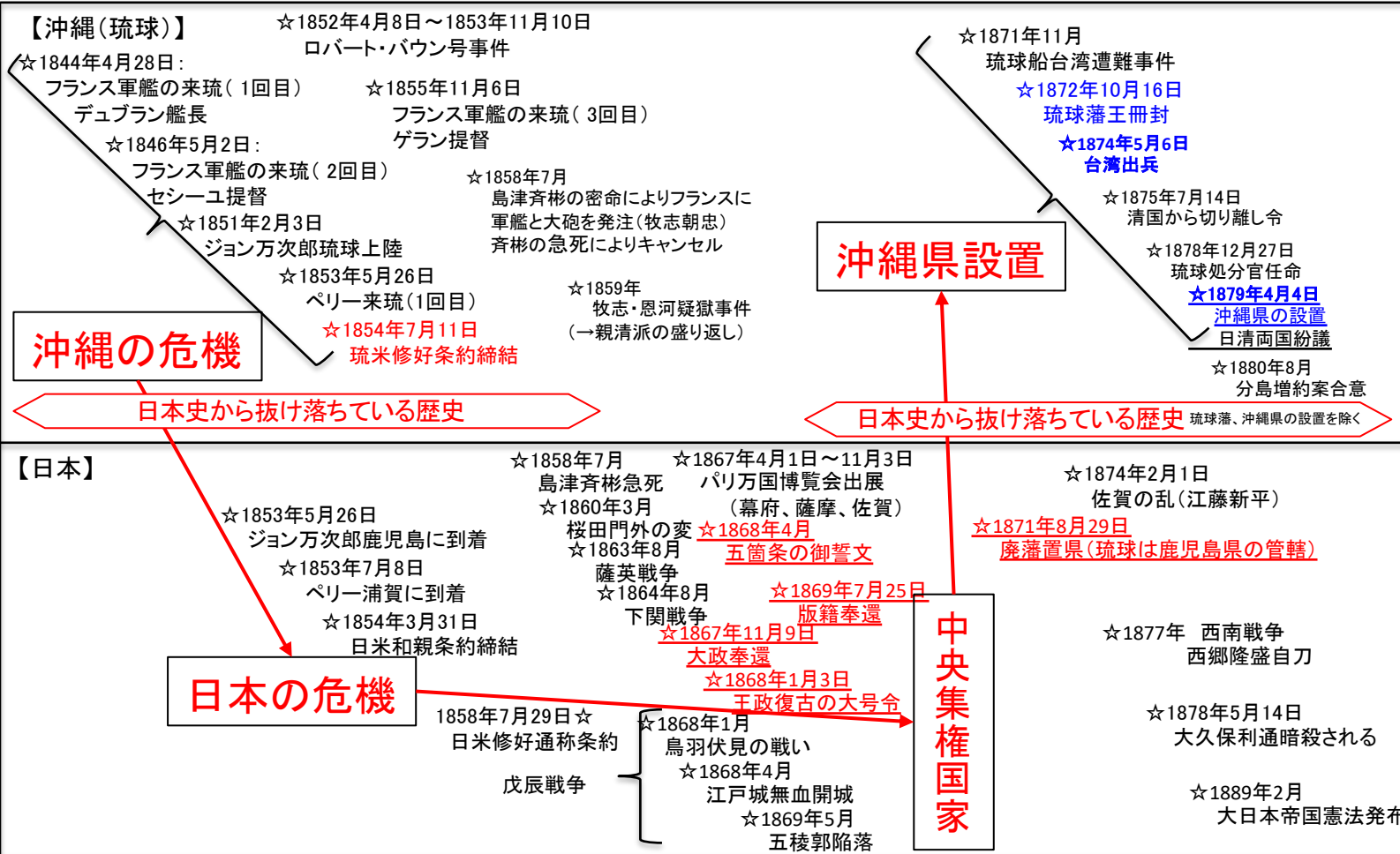


# 「沖縄の危機」に始まり「沖縄県設置」で完成した明治維新

アヘン戦争

南京条約

1842年8月29日



日清戦争

明治27(1894)年7月25日~

☆1895年4月17日 下関条約

日露戦争

明治37(1904)年2月8日~

## <集成館事業>



薩摩の富国強兵政策



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚  
2019/8/26

# ペリー来航前の異国船来の琉球①

|   | 年月日                                      | 国  | 船名     | 艦長                | 目的・活動                                                                                                                                                         | 交流                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
|---|------------------------------------------|----|--------|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 文化13年<br>(1816年)<br>9月16日<br>～<br>10月27日 | 英国 | アルセスト号 | サー・<br>マレー・マクスウェル | 1816年、清に通商を迫るために中国に向かうイギリス全権大使アマーストら外交団を軍艦ライラ号の艦長として北京に送り届けたホールは、同行したアルセスト号とともに、東シナ海海域の探検・調査のため朝鮮の西海岸と琉球王国に寄港、那覇に40余日間滞在した。一行は調査や観測を徹底して行ない、全島地図も1週間余りで完成させた。 | <p>&lt;通事訳：真栄平と安仁屋&gt;<br/>われわれのもっとも誠実な、親しい友人の一人だった真栄平は、ほんの数週間でもって、どうにか、自分の意思を相手に通じることが出来るか程度に英語に熟達した。彼が最初に船にやってきたのは、島民たちが、われわれのほうには、何ら危害を加える意思がないことを納得する前のことで、明らかに、われわれの行動をスパイするのが目的だった。（「アルセスト号効航海誌」より）</p>                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|   |                                          |    | ライラ号   | バジル・ホール           |                                                                                                                                                               | <p>&lt;通事訳：真栄平と安仁屋&gt;<br/>二人の役人が非常に熱心さで、英語を習っていて、しかも著しい心境を見せている。その一人は真栄平（メーデーラー）でもう一人は安仁屋（アニヤ）である。彼らはクリフォード氏をまねて、常にノートブックを持参し、習ったあらゆる言葉を彼らの文字でそれに記入した。二人とも、中々頭の良い男で、始終吾々の間にいた。折にふれて、彼等に払われる尊敬からみると、彼等が自称しているより、遥かに高い身分の人物ではないかと思われるのであった。（「大琉球島航海記」より）</p>                                                                                                                                                                                                                           |
| 2 | 文政2年<br>(1819年)<br>11月19日                | 英国 | ブラザーズ号 | ゴルドン              | 英国の国旗を掲げた2本のマスト帆船ブラザーズ号が那覇に寄港、補給物資の確保と貿易の許可を求めてきた。                                                                                                            | 船乗りたちは、沖縄人の幾人かがやや稚拙ながら、英語を口にするのをみて驚きを隠せなかった。彼らやアルセスト号やライラ号関連の海図やノートを誇らしげに我々の前に差し出した。後年、ウィリアム・アプトン・エディスはその時のことを次のように記して発表している。「彼らは船を去るとき、貴殿らが上陸すると色々うるさいので、そのようなことのないようにと私に頼み込むように行ってきた。私は笑いながら、いや、明日君らと一緒にいくからと言ってやった。そして、互いに頭を下げ、握手し合ったものだが、彼らが西洋式のマナーを身に着けているのは以外だった。彼らの親切で丁重な物腰にはもっと驚いた。彼らは生まれながらにして徳義心を身に着けているかのようで、いわゆる我々の知る文明という名の悪徳など持ちあわせがないかのようだった。攻撃用の武器という類のものには気づかなかった。」（ジョージ・H・カー著「島人の歴史」P310～311）                                                                       |
| 3 | 文政10年<br>(1827年)<br>4月23日<br>～<br>5月12日  | 英国 | ブロッサム号 | ビーチ               | ビーチは、「真水を得、艦の修理を行い、病人を回復させるため」と答えた。<br>(論文：琉球における英学発達小史 宮永孝より)                                                                                                | ビーチ艦長（1796-1856）は、ホールやマクロードの本によって、真栄平や安仁屋のことを識っていた。彼らは相次いでやってってきた役人の中に安仁屋をみいだすのである。かれはまず琉球式に、ついでイギリス風にあいさつしたのち、ふところから単語集を取り出すと、まず英語で What for come Doo Choo? (何のために琉球にやってきたのか) と尋ねた。<br>ビーチ艦長は一行の中の病人の様子を気遣う「情け深いルーチュエの人たち」が看病に精出してくれたとして次のように記している。「この良心的な人々は、我々よそ者の出現で、不安で落ち着かぬ状況にあつて、なお病人の介護で忙しそうに立ち働いてくれた。そして我々の出港の時が迫ると知るや、いつもはそそくさと退去するのに、今度はなかなか立ち去ろうとしなかった。いよいよその日がくると、温かく節度あふれる態度で、別れを惜しむといった表情をみせ、キャプテンビーチはじめ居並ぶ将官の一人一人の手を強く握りしめた。そして各将官に記念の印にちょっとした贈り物をぜひ受け取って欲しいと頼み込んでいた。 |



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛  
2019/8/27



## ペリー来航前の異国船来の琉球②

|   | 年月日                                           | 国     | 船名             | 艦長                                            | 目的・活動                                                                                                        | 交流                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---|-----------------------------------------------|-------|----------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4 | 天保3年<br>(1832年)                               | 英国    | アーマスト号         | リンゼイ                                          | 東インド会社を代表する医師で牧師のドイツ系イギリス人ギュツラフが乗ったこの船は、中国沿岸から東シナ海を通して日本に通じる航路を調査することを目的としていた。5日間の琉球滞在中に、貿易と布教の可能性を打診しようとした。 | 通事安仁屋について宣教師ギュラツの発言<br>「広東ではヨーロッパ諸国との交易について色々と質問攻めにあつたが、彼らがかかなり地理上の知識を持っていることがわかった。政治についても中々の雄弁ぶり、中国が英国より近くに位置するので、中国との友好関係をより大事にしたい、という彼らの気持ちが理解できた。中国からは、紅毛人との付き合いは程々にしろとの厳しい司令をうけているに違いなかったが、気のいい彼らはお構いなしといったふうだった。安仁屋には福州でもあっているが、中国との交易事情についてはしばしば口にしていたものの、日本との付き合いは全く無いと言ってはばからなかった。那覇の港に停泊中の三艘の帆船は薩摩のもので、嵐に遭遇し、急遽この港にたどり着いたものだとも……」<br>(ジョージ・H・カー著「島人の歴史」P323)<br>8月24日、安仁屋通詞と張達が来船した。リンゼイは、イギリス国民はいつも琉球の人々のこれまでの友情に感謝していると述べて、自由な通商が大きな利益をもたらすことを納得させようとしたが、東インド会社の代表であるリンゼイが中国の事情に明るいことがシレて、琉球川の警戒心は強くなった。(琉球英語通詞・安仁屋政輔) |
| 5 | 天保8年<br>1837年<br>7月12日                        | 英国・米国 | ラーリー号<br>モリソン号 | ・パーカー(外科医・宣教師)<br>・ウィリアムズ(後のペリーの通訳)<br>・ギュツラフ | モリソン号：日本人漂流民の送還 岩吉、久吉、音吉、庄蔵、寿三郎、熊太郎、力松。<br>ラーリー号：日本布教の足がかり<br>ラーリー号とモリソン号が那覇に停泊中だということは、すぐに薩摩と江戸に伝えられた。      | ＜ウィリアムズの安仁屋政輔との会話の記録＞<br>彼は、海中から手帳を取り出し、ちょっと見てから片言の英語で話しかけた。我々が話しているのは安仁屋ではないかと問うと、彼は肯定した。彼らの顔つきから、われわれがどこで彼の名前を知ったかを知ったそうであった。安仁屋は、われわれが中国語を解することを知って、この実験の後、英語の語彙に訴えることをほとんどしなかったが、彼の言葉がビーチ艦長が報告しているのと似ていることがわれわれの全ての興味をそそった。短期間ながら琉球の官民と様々な交流をしたが、特筆すべき事は、パーカーが種痘を教えたことである。彼は琉球の医師にピアソンの酒盗の本の漢文役を貸して筆者させ、役人と医師にヒールズ・ワクチンや刀針を寄贈して、種痘の普及を進めた。パーカーは、「種痘が大琉球国の何万もの人々の間にユウコウに移植されると期待して良いだろう。琉球は日本の属国であって、薩摩と直接の交通があるから、種痘を江戸に紹介することに失敗しても琉球から日本に伝えられると信じる理由がある。」と述べている。(琉球英語通詞・安仁屋政輔)                                               |
| 6 | 天保11年<br>(1840年)<br>8月14日                     | 英国    | インディアン・オーク号    |                                               | 中部沖縄の沿海で猛烈な嵐に遭遇し、乗組員ほぼ70人が難船の危機に瀕した。二人のインディアン船員が何とか命綱を岸に繋ぎ、まもなく乗組員全員が無事上陸し、6週間逗留。                            | 「間もなく、「私共は、かなり身分の高そうな琉球の紳士を知ることになったが、彼は聡明な人物で、英語を数語口にし、また理解できるようだった。14年ほど前、琉球島に立ち寄った英船ブロッサム号のキャプテン・ビーチに教わったと話していた。」「島の人たちの正直で親切なことと言ったら絶筆に尽くしがたい。船の難破船地点より金、銀、衣服、ワイン、ビールに酒類が四方八方に投げ出されていて、大抵の人間には思わず手を伸ばしたくなるような誘惑というか衝動を覚えしめるものとしてはこれ以上のものはなかった。しかし、陸揚げされた品々にはただの一つとして手を触れられた形跡がなく、また紛失もしていなかった。彼らはこれ以上の心遣いもなかりと思えるほど献身的に我々一行の苦境を和らげるべく尽くしてくれた。」(ジョージ・H・カー著「島人の歴史」P328-P329)                                                                                                                                                      |
| 7 | 天保13年<br>(1842年)<br>11月30日<br>～<br>翌年<br>2月4日 | 英国    | サマラン号          | エドワード・ペルシ                                     | アヘン戦争を終えて香港を植民地にしたイギリスが、東シナ海からフィリピン、日本の近海を測量し、島々の事情を調査するためでした。                                               | 海域調査に船長は地元八重山、宮古の人たちを雇用している。「労務者や使用人の数は50人かそれ以上にのぼり、調査が村方村、島から島へと進むうちに、その顔ぶれは何度も入れ替わりがあった。それで当方の調査危機や資材などは結局何百人もの人手に触れたことになる。いわゆるちょっとした出来心からの盗みとかいったことはただの一見もなかった。運送中に、用具かなにかが見当たらない場合は、その都度皆が大変なことになったといった心配顔をし、みづからうまでは落ち着かない様子だった。そのような人たちの表情を見ると、彼らがとてもなく徳義心の熱い人達だというkとが判る。」                                                                                                                                                                                                                                                   |



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛  
2019/8/27

# ペリー来航前の異国船来の琉球③

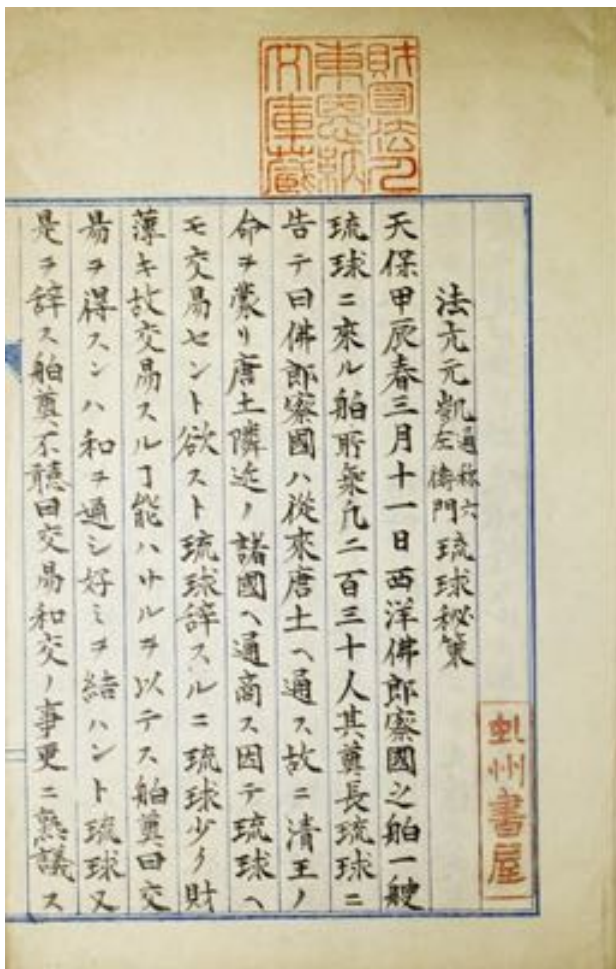
|    | 年月日                                   | 国  | 船名                            | 艦長      | 目的・活動                                                   | 交流                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|----|---------------------------------------|----|-------------------------------|---------|---------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 8  | 弘化元年<br>(1844年)<br>4月28日<br>～<br>5月6日 | 仏国 | アルクメーヌ号                       | デュプラン   | 交易権を求めての寄港。<br>フォルカードと称するカトリックの宣教師とその中国人助手、オーガスティオン高を上陸 | 首里はそのような特権を与えることを頑なに拒んだ。仏人らは、英国が日本攻略を企んでおり、攻撃の拠点として沖縄を占領するであろうと言い、それ故、琉球王国は仏国は仏国の保護の下にすべきであると主張した。沖縄側はそれも拒絶した。そのような事の成行きに驚く首里を尻目に、フランス側は、フォルカードと称するカトリックの宣教師とその中国人助手、オーガスティオン高を上陸させたいと迫った。フランス側の言うには、その二人は沖縄で言語の学習をするため、いずれ仏国皇帝と琉球王国との間に正式な合意を得るべく強大なフランス艦隊が沖縄にやってくる折りの通訳官として必要だからと言う。この県芸されざる客はとりあえず天久聖現寺に収容されることになった。その小さな寺は1816年依頼、異国の来訪者たちのための宿泊所として利用されているものである。彼ら異国人らの行動には絶え間なく監視の目が向けられた。宣教師と軍勢力という二大脅威、江戸の鎖国令に真っ向から反する時代が再びここ沖縄で起こりつつあった。<br>南京条約によって英国が中国より勝ち取った種々の要求事項、戦争、譲歩といった中国沿岸での出来事に江戸はよく通じていた。長崎にいるオランダの貿易独占者らは、自分らの特権を保持せんものと、英仏両国が沖縄に基地を作ろうとしている、と江戸に警告していた。1844年におけるこのような種々の出来事は、きたるべき諸事象の展開、その前兆を証するかのようであった。（ジョージ・H・カー著「島人の歴史」P333～334） |
| 9  | 弘化元年<br>(1844年)<br>4月                 | 英国 | スターリング号                       | ベッテルハイム | イギリス海軍琉球伝道会による布教のための宣教師派遣                               | 那覇港沖にいきなりをおろしてすぐに異国通事ら来船。寄航目的をたねると、ベッテルハイムは「英国王の命を受けて来た」とうそぶく。まもなくしてフォルカードが船に訪れ、ベッテルハイムは西洋人宣教師が居たことに驚く。フォルカードは二年間の困難な布教活動と、苦しい台所事情を打ち明け、金銭を無心する。彼は貸した。上陸まぎわになって、同行の子守が下船を拒否し、船長も役人の許可なく積荷をおろすことをいやがった。ベツテルハイムは策をろうし、船に来ていた伝馬船の水夫たちを船室に案内して洋酒を飲ました。その間に、デッキにいる兵士に、積荷を伝馬船におろしてもらう。水夫に事の次第を伝えと、しぶしぶ港へ漕ぎ出した。荷揚げにさいし、役人の抵抗を受け、荷物の一部が「海に投げこまれた。これにめげない彼は無理押しの陸揚げ」を終了させた。夫婦と二人の子ども、子守嬢、清国人通訳劉と犬2匹が「上陸を果たした。（比嘉朝進著「最後の琉球王国～外交に悩まされた大動乱の時勢～」P24）                                                                                                                                                                                                                       |
| 10 | 嘉永5年<br>1852年<br>2月19日                | 米国 | ロバート・バウン号                     |         | 中国奴隷船の奴隷の暴動、脱走                                          | 中国アモイからカリフォルニア州へ航行中のアメリカの奴隷貿易船、ロバート・バウン号内で、400人の中国人を裸にし、辮髪を切り落とし、CやPの焼き鐙を胸に押し当て、売り物にならない病氣持ちは海に突き落とし、舫に喰わせたところ、奴隷にされたことを知った中国人は暴動を起こした[1]。苦力は米国人船長と船員を殺して船を操縦したが、2月19日に石垣島の崎枝村沖で座礁し、380人の中国人苦力が上陸した。その後、離礁したバウン号の報告を受けてイギリス船2隻が石垣島に来航し、3月16日に富崎の収容所を砲撃し、さらに武装した兵士200人以上が上陸して逃走した苦力を射殺・捕縛して、白人に抵抗した見せしめにその場で百人近くを吊るし[3]、3月23日に出航した。また、4月4日にはアメリカ船1隻が来航し、兵士100人以上が上陸・探索を行ない、4月12日に引上げた。                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 11 | 弘化3年<br>(1846年)<br>5月2日<br>～<br>7月17日 | 仏国 | サビーヌ号<br>ビクトリユーズ号<br>クレオパートル号 | セシーユ提督  | 条約の締結                                                   | 1846年5月2日、フランス艦サビーヌ号が那覇に姿を現し近海の測量や那覇・首里の探査を試み、5月31日、北部の今帰仁間切へ向けて出航しました。6日後の6月6日、フランス東洋艦隊のビクトリユーズ号とセシーユ提督の乗船クレオパートル号（乗員500人）が那覇港に姿を現し琉球に滞在していた通訳フォルカード神父ら二人を乗せて今帰仁へ向かい、3隻のフランス艦隊が今帰仁の運天港に終結することになりました。6月17日から7月14日までの約1ヶ月間もの長い間、3隻の艦船の姿で威圧を与えつつ琉球に条約の締結を迫ったのです。この交渉で、特筆することは、セシーユ提督が琉球駐在の薩摩役人にも言及し琉球が薩摩の支配下にあることを見抜いている事、ヨーロッパとの貿易のメリットを強調しながら案に薩摩の厳しい支配から脱却することを勧告していること、更にイギリスの琉球占領の意図を伝え暗にフランスの保護下に入れば琉球の安全が保証されることを示唆していることです。要するに条約締結を要求するセシーユ提督の最終的な狙いは、琉球を保護国としてライバルのイギリスと対抗するための拠点を築くことであったと思われます。琉球は巧みな引き伸ばし戦術を駆使して条約締結に全力を尽くし、7月17日に琉球当局の説得に失敗したセシーユ提督は3隻のフランス艦を率いて運天港を離れて長崎にむかいました。（そうだったのか沖縄！P85）                                                  |

# 五代秀堯の「琉球秘策」

## 「琉球ノ処分ハ、絶ト和トノ二策ヲ主トスヘシ」

### 法元凱琉球秘策 [写本]

(ほうこうげんがいうきゅうひさく)



### <理由(要約)>

フランスとイギリスはいずれも琉球を西洋のジャワのごとくする志を持っている。琉球でいったん戦争が起これば薩摩藩は精兵大軍を送って戦うことになるが、海上の戦いでは勝ち目は無く、たとえ首里城を拠点に戦っても多勢に無勢で、中山王かならず降参し、外は急卒の応援無く最後の勝利を期待することはできない。しかも、大軍を琉球へ派遣すれば、薩摩藩の守りが空虚となるだろう。そこにヨーロッパ諸国が連合して押し寄せれば、是よりして日本国中の干戈となるべし。故に琉球の処分は絶と和の二策を主とし、決して「戦」の選択肢を用いてはならない。

### <絶の理論①(対フランス)>

1. 琉球は小国にしてフランスと交易できる品物など無く、常に清国と日本からの供給に依存している。
2. 台風や水害で、餓鬼にあった場合は、日本諸島のちから似て餓死を免れている。
3. 日本と離れて琉球は独立することは不可能。日本はキリスト教を禁止し、西洋諸国との交通も禁じている。フランスと交通するときは、日本との交流を断つことになる。
4. 琉球が日本を離れフランスについた時、飢饉に遭遇した時、フランスが来港できない場合は、琉球は餓死を免れない。
5. 琉球は既に孔子の教えを学び他教を受けることはできない。

### <絶の理論②(対フランス)>

1. 琉球の両属の実情を告白して「琉球は表では清の冊封を受けてるといっても、日本に貢ぎ、日本より保護の国なり。
2. 琉球国は小国で独立は不可能
3. かつ、日本は鏡を接し、餓鬼凶蔵等皆日本に救いを仰ぐなり。
4. 万事日本の許可を受けること無く、琉球独り決断して事を行うことは不可能。

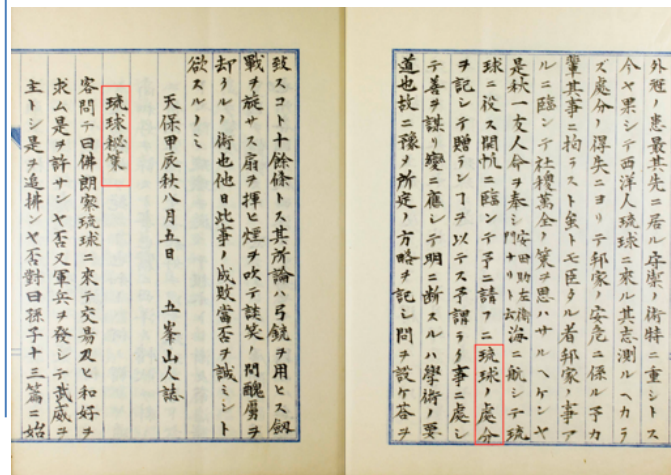
### <和の理論(対幕府)>

1. 明歴中、幕府の名にて琉球の衣冠は清主の命に従わしめられしは、異国を以て処分有りし為なり。方今、琉球に通商を許すも、異国所分の例を用いるは明歴の例と同意なれば、幕府の例を請い、且つ通商を許さずんば干戈の禍い起こり、日本迄も乱れとなるべきことを以て告げば、幕府これを以て許さん。」

### <和の理論(対外国)>

1. 琉球は島津家久以来、薩摩藩に属し、附庸の国となる。然れども清の冊封を受けること故の如し。
2. 邦君の命にて薩摩附庸の国たる事は、海外諸国に泄すことを禁ぜられ、陽には許さるは実諸島と往来通商するのみ也。然れども清国及び海外諸国も、その実を知らざるもの無し。そのこと、清国諸書に多く見ゆ。
3. 琉球十三万石は薩摩藩七十万石の内なるは、日本国中迄のなり。
4. 琉球、清国を父として、日本を母とする、この言葉実に称へり。

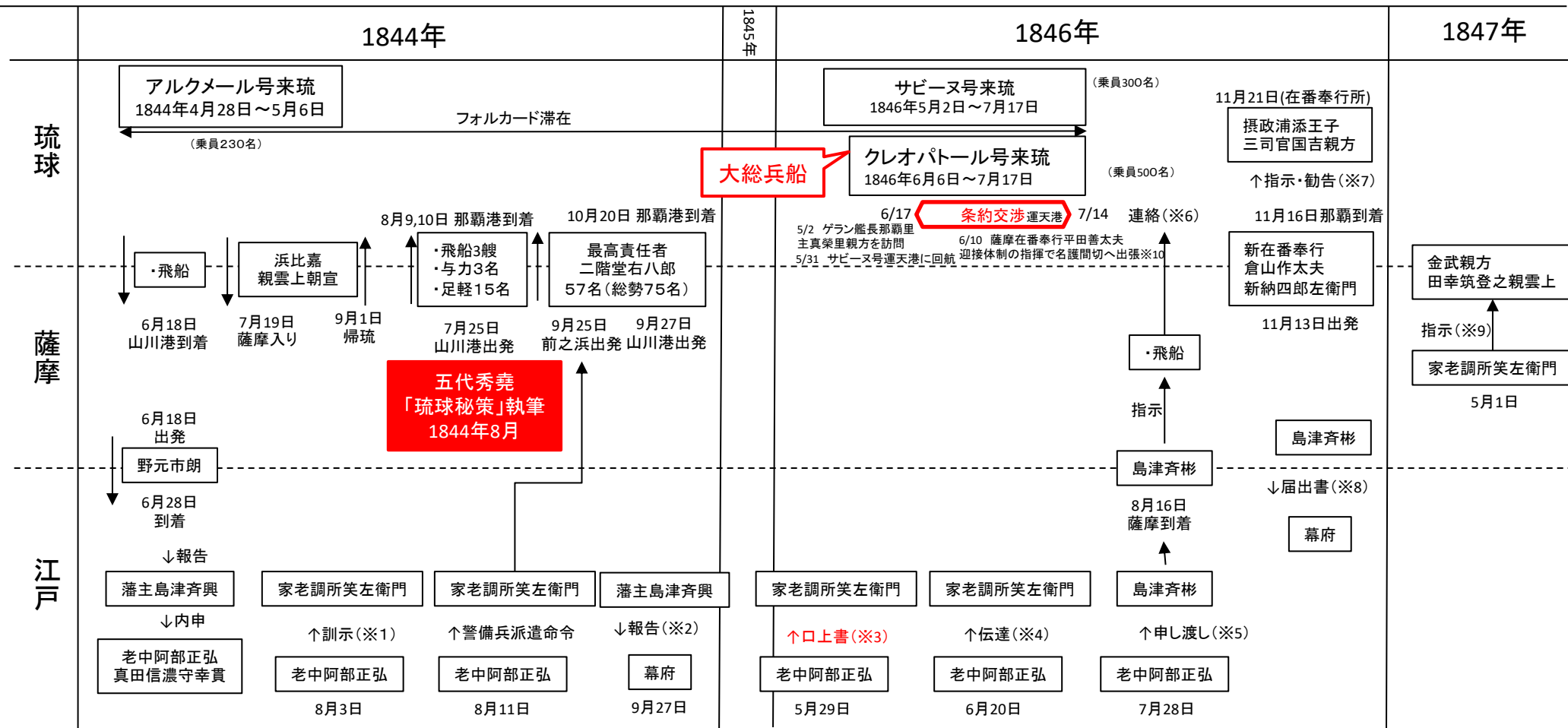
### <「琉球処分」=「琉球秘策」>





# フランス軍艦来琉に対する薩摩・江戸の動き

黄埔(清仏)条約締結  
1843年10月24日



※1「琉球国ハ国外ノ訳、平生ノ御処置振モ格外ナルカ、大隅守(斉興公)見込ヲ持テ後患ナキヲ要シ処置スヘキ旨」  
 ※2那覇来航のフランスの艦長がフランス国皇帝の命令で琉球とも交渉して交易したいと申し出たこと、異国人一人、唐人一人を大総兵船のための通訳として残置したことなどを通報、将来大総兵船来着のときは何を押し付けられるかわからない。」  
 ※3「琉球にのみフランスとの交易を認める」  
 ※4「斉彬の帰国が承認された。」  
 ※5「交易を始める事になった場合はフランス限り、規模はあまり大きくしないように」  
 ※6「布教以外は受け入れ琉仏貿易の開始の可能性もある。」

※7通商の1条は許可すること。琉仏貿易の具体案(運天港を貿易港、薩摩の資金を投入)を示して説得  
 ※8一昨年来の仏英船の来航に伴う琉球への派兵と、長々と居座る仏英人の敬語のトラブル、琉球の困窮、輸送費用など遠海を隔てているため、諸事が倍かかる。  
 ※9「外国人への対応は平穩を主とし、やむを得ない場合は広東を拠点として貿易を開始。」  
 ※10琉球当局としても総理官クラス、布官クラスなどにわけて「大総兵官にたいする心得」を作成し、フランス側の質問に対する返答の仕方を徹底させていた。



## 沖縄に上陸したジョン万次郎

1851年旧暦1月、万次郎らは琉球国摩文仁間切小渡海岸（現在の糸満市大度）に上陸。取り調べのため最初、那覇に向け護送されるが、那覇に居留していた外国人を避けるため、手前で引き返し豊見城間切翁長村（現在の豊見城市字翁長）の高安家に留め置かれることとなった。

翁長村滞在中は、監視は付いたが集落内を出歩くことは自由で、ゆるやかな軟禁状態だったようである。社交性に富み好奇心旺盛な万次郎は、高安家から度々外出しては集落の人々と交流し、六月ウマチーには、ンマイー（馬場）で綱引きにも参加している。また、言語能力に長けた万次郎は、地元の人々とのこうした交流を通じ半年間の滞在中で沖縄方言も理解したという。薩摩に送られるため琉球を離れるとき、世話になった高安家の娘らに万次郎は方言で別れを告げたというエピソードも残されている。

その後の万次郎は、咸臨丸で太平洋を横断し、日米修好条約調印使節団の通訳官として勝海舟や福沢諭吉とともに訪米するなど、幕末から明治にかけ開国に向かう動乱の時代に、米国での経験から得た貴重な知識や技術、西洋事情や文化を伝えるなど日米の橋渡し役として多方面で活躍した。

琉球滞在中に万次郎を温かくもてなした高安家と中浜万次郎家とはその後も代々交流が続き、1994年（平成6）3月には、ジョン万次郎がとりもつ縁で豊見城市と万次郎の出身地・土佐清水市との間で姉妹都市盟約が締結された。



## 唐人墓とロバート・バウン号事件

1852年4月8日～11月10日



唐人墓（とうじんばか）は、沖縄県石垣市の観音崎にある墓地。咸豊2年（1852年）のロバート・バウン号事件で犠牲になった中国人苦力の慰霊のため、1971年（昭和46年）に建立された。咸豊2年（1852年）、中国アモイからカリフォルニア州へ航行中のアメリカの奴隷貿易船、ロバート・バウン号内で、400人の中国人を裸にし、辮髪を切り落とし、CやPの焼き鍍を胸に押し当て、売り物にならない病気持ちは海に突き落として鯨に喰わせたところ、奴隷にされたことを知った中国人は暴動を起こした。苦力は米国人船長と船員を殺して船を操縦したが、2月19日に石垣島の崎枝村沖合で座礁し、380人の中国人苦力が上陸した。事情を知らない八重山の役人たちは崎枝村の赤崎に収容所を設けた後、監視しやすい富崎に移して収容した。

その後、離礁したバウン号の報告を受けてイギリス船2隻が石垣島に来航し、3月16日に富崎の収容所を砲撃し、さらに武装した兵士200人以上が上陸して逃走した苦力を射殺・捕縛して、白人に抵抗した見せしめにもその場で百人近くを吊るし、3月23日に出航した。また、4月4日にはアメリカ船1隻が来航し、兵士100人以上が上陸・探索を行ない、4月12日に引上げた。捕縛を免れた中国人は琉球王国に保護されたが、収容所の衛生は悪く、翌年9月29日に中国に送還された生存者は172名で、この間に病死、自殺、あるいは行方不明になった者は128名に上った。これを弔った三百唐人墓とよばれる古い石積み墓が近年まで付近に点在しており、陶製の墓碑が八重山博物館に收藏されている。



## ジョン万次郎の足跡



土 地

漁に出て嵐に遭い漂流  
無人島生活を経て捕鯨船に救助される

【附註】：本會為配合行政院衛生署公告之「菸草類產品包裝標示規定」，自即日起，本會所屬各分會之菸草類產品包裝，均應加貼「健康警語」，以資提醒消費者注意。本會所屬各分會之菸草類產品包裝，均應加貼「健康警語」，以資提醒消費者注意。本會所屬各分會之菸草類產品包裝，均應加貼「健康警語」，以資提醒消費者注意。



「いちやうばち」一で一」に触れる

[illegible]

アメリカ

アメリカ事上に上陸  
日本人物の留学生誕生

[illegible]

陳文仁

厚文仁書所で取り調べ  
同物には本や地図、  
ヒストルも

[illegible]

小渡浜上陸

地球王国·小瀧美紀上卷

[illegible]

万次郎の功績

國學人として活躍  
そして開国へ



日本揚国の第一歩  
アドベンチャー号でいざ出陣へ。

[illegible]

日本帰国の決意  
金山で600ドル稼ぐ

[illegible]



| 陽暦         | ロバート・バウン号事件年表                                                                                                                                                                                                            |
|------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1852/3/21  | ロバート・バウン号、苦力410名を積み込んでアモイを出発。カリフォルニアに向かう。                                                                                                                                                                                |
| 1852/3/31  | 苦力の反乱が起きる。船長と航海士二人、船員3人の合計6人が殺害される。他の船員はマストに登って難を逃れる。苦力は船をのっとり、台湾に向かわせた。                                                                                                                                                 |
| 1852/4/8   | しかし、航海する技術がなく石垣島沖のサンゴ礁に座礁。苦力船の転覆を恐れて次々と石垣島に上陸                                                                                                                                                                            |
| 1852/4/9   | 八重山在番役人は、速やかに船に戻り立ち去るよう求めたが、風を待って退去するということになり、更に船から上陸。合計380人。やむなく、赤崎地方に臨時の収容所をこしらえて、唐人たちを収容。食料を与える。                                                                                                                      |
| 1852/4/11  | 米国人9人が上陸。別の収容所をつくる。                                                                                                                                                                                                      |
| 1852/4/12  | 米国人は一人だけ残して船に戻り、苦力23人を制圧、21人を縛り付けその船はまもなく出発。置き去りにされた唐人380人と米国人一人は慌てふためき船を追いかけるが船は海の彼方に去っていった。                                                                                                                            |
|            | アモイのアメリカ領事ブラッドレイは、イギリス領事サリバンに苦力にとらわれている米人一人の救助と反乱苦力の逮捕を要請。苦力貿易を推進していたサリバンもこの苦力反乱に憤慨して同意。イギリス船リリー号と蒸気船セミラミス号を派遣。                                                                                                          |
| 1852/5/4   | リリー号、石垣島崎枝沖に姿を現す。武装兵200余人が四隻のボートで上陸。赤崎収容所に来たがもぬけの殻のため引き返す。更に武装兵20人が上陸し、役人に苦力の居場所を聞き出し、富崎に移動したことを知る。リリー号を富崎沖に回し、富崎収容所めがけて大砲を連続して打ち込む。二百余人の兵がボート五隻で上陸。苦力は山に逃げ散り、英兵が追いかけて3人を射殺、14人が投降、二人は絶望して山中で首吊り自殺。                      |
| 1852/5/6   | 更に一隻の英船が到着。武装兵が山狩りをし苦力30人を捉え、米国人一人を救出。                                                                                                                                                                                   |
| 1852/5/7   | 英国武装兵、苦力五人を捕らえる。                                                                                                                                                                                                         |
| 1852/11/30 | 小浜島に異国船一隻が漂着（米国人二人）                                                                                                                                                                                                      |
| 1852/5/11  | リリー号、後日米船を派遣することを言い残して石垣島を去る。                                                                                                                                                                                            |
| 1852/5/19  | 琉球王府、苦力たちを自力で帰国するよう説得する任務を与え、石垣島へ特使、伊野波等を派遣。                                                                                                                                                                             |
| 1852/5/22  | 米艦船サラトガ号石垣島富崎(ふさぎ)沖に停泊。                                                                                                                                                                                                  |
| 1852/5/23  | 武装兵が夜間まで苦力を探索。50人を捕縛。                                                                                                                                                                                                    |
| 1852/5/24  | 琉球王府が苦力の保護を命じて派遣した役人が石垣島に到着。八重山在番役人に密かに食料を与えて保護すること、米兵への捜査協力を断ることを命ずることを指示。                                                                                                                                              |
| 1852/5/28  | 米兵武装苦力7人を捕縛。米兵に琉球側が苦力の逃亡に協力していることが発覚。非難される。                                                                                                                                                                              |
| 1852/5/30  | サラトガ号、苦力を勝手に中国に護送しないように釘をさして引き揚げる。                                                                                                                                                                                       |
|            | 伊野波等琉球役人は散らばっている苦力250人を富崎の収容所に集め、自力で帰国することを促すが、操船できないと琉球に護送を要請する。伊野波は飛船を沖縄へ送って琉球王府の指示を待つ。琉球王府、清国へ護送してよいかどうかを伺う咨文を発して進貢使に託すことに決まる。清国に兵船を八重山に派遣しないようにも求める。その返事を待つ間、苦力を説得するため、役人3人を更に石垣に派遣。苦力たちの不満をなだめながら、清国からの護送許可をひたすら待つ。 |
| 1852/11/11 | 進貢使、毛種美ら119人を乗せた進貢船那覇港を出発                                                                                                                                                                                                |
| 1852/12/8  | 進貢船、番船浦に到着。翌日、進貢使一行琉球館に入る。（緊急の任務を帯びた馬克承は12月6日小舟で一足早く琉球館へ入り、咨文を清国の役人に点検してもらう。）                                                                                                                                            |
| 1853/4/2   | 飛船派遣について許可が出される。                                                                                                                                                                                                         |
| 1853/5/26  | 苦力護送を命じる咨文を届ける飛船が福州の五虎門を出発。                                                                                                                                                                                              |
| 1853/6/1   | 清国から沖縄に向った飛船が竹富島に漂着。石垣に回って清国からの護送許可が伝わる。                                                                                                                                                                                 |
| 1853/10/21 | 午後8時、苦力護送船那覇を出発（護送小唐船は10月27日、護送馬艦船は10月30日に石垣に到着）                                                                                                                                                                         |
| 1853/10/31 | 午後2時、苦力護送船石垣を出発                                                                                                                                                                                                          |
| 1853/9/29  | 護送船2隻172人の苦力を乗せて石垣島を出発。（護送小唐船に苦力107人、護送馬艦船に苦力70人を乗船）                                                                                                                                                                     |
| 1853/11/3  | 護送船、中国に近づいたところで海賊におそわれる。苦力47人はボートで逃亡。                                                                                                                                                                                    |
| 1853/10/14 | 2隻は福建省に到着。苦力125人を福建官憲に引き渡す。                                                                                                                                                                                              |



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛 15  
2019/8/27

# 琉球防衛のために軍艦建造を目指した島津斉彬

## 【琉球大砲船の建造】

斉彬が藩主に就任したころ日本の船は対戦建造禁止令の制約を受けていた。斉彬は、海軍力・海運力を強化するには様式船、それも蒸気船が必要と考えて、世子時代から研究をすすめていた。そして、藩主に就任するとまず、「いろは丸」という船の建造に着手した。

それは、和洋折衷の実験船のようなもので、嘉永4年頃完成し、琉球航路で使われた。同年、ジョン万次郎が琉球に上陸し、捕鯨船の構造を聞き取らせ、それを参考に「越通船」という小型帆船を建造した。越通船は多数建造され、安政元年には3隻が鹿児島から江戸に回航している。

斉彬は本格的な様式船を建造したかったが、大船建造禁止令がある限り不可能だった。安倍と相談し、「**琉球大砲船**」として建造するようにした。**嘉永6年、5月29日、桜島で琉球大砲船の建造が始まった。ペリーが浦賀に現れたのは、その3日後である。**



## 【大船建造禁止令を解禁させた島津斉彬】

ペリーの浦賀来航を目にした幕府も海防強化の必要性を認めたため、それをチャンスとして、斉彬は幕府に大船建造禁止令の解禁を要請し、幕府はそれを認めた。斉彬は、琉球大砲船を様式船に作り直すと届けた。洋式船は、安政元年に竣工し、「昇平丸」と改名された。



## ペリーの航路

琉球を訪れたペリーの来航を記した記念碑。

日本開国という歴史を動かした人物、アメリカ東インド艦隊司令官・ペリーの足跡を記した碑。泊港近くの「泊外人墓地」に建てられています。ペリー艦隊は日本との交渉の前に琉球へ来航し、1853年5月26日に那覇港に入港しました。ペリーは同年6月6日、首里王府の抵抗を押し切って上陸し、首里城を訪問しました。記念碑には、その日付が刻まれています。



## ペリー提督の首里城訪問

海軍一家の中で育ち、自ら海軍軍人として対メキシコ戦争などで勝利を収め国民的英雄となり、また遅れていた海軍の近代化にも尽力し、蒸気艦の建造を推し進め蒸気海軍の父と讃えられたペリー（1794-1858）が、最後の大仕事、二度の日本遠征から戻ってきてから著した公式報告書「日本遠征記」に収められた貴重な版画図版です。図版はドイツ人の随行画家ヴィルヘルム・ハイネ（この時わずか26才！）のスケッチをもとに制作されています。

編纂に心血を注いだペリーは完成後わずか三ヶ月後に心臓発作で亡くなってしまいますが、この遠征記はペリーの日本および日本人に対する冷静な観察、そしてそれから予言された日本の将来についての記述など、極めて重要な日本誌として今もその価値は色褪せることはありません。日本遠征途上の1853年5月26日、琉球に立ち寄ったペリーは王国側に首里城訪問を打診しますが拒否されてしまいます。そこでペリーは6月6日、軍楽隊を先頭に総勢200人以上の武装した水兵を引き連れ、市内を行進しながら首里城に向かいました。王国側は仕方なくペリーの入城を許し、ペリーは王国側に開国を促す大統領親書を渡しました。ハイネによるこの首里城「守礼の門」におけるペリー一行の絵は大変有名で、アメリカの博物館に残されています。





# 島津斉彬の幻の軍艦購入計画(安政4年～5年[1857-1858年])

新琉球王統史Ⅰ 9 尚泰王(中) P23～P48

三司官座喜味に苛立っていたのが、欧米との通交を開き、蒸気船(軍艦)などを購入して近代軍備を急ごうとしていた島津斉彬です。斉彬のそれらの計画は、幕府との関係から「琉球」を隠れ蓑にして実現しようとしていたのであり、その場合、言うことをきかないのが、頑固な三司官座喜味親方)であって、彼こそ、斉彬の壮大な計画の妨害者と目されていたからです。斉彬は腹心の市来正右衛門(いちき・まさえもん)に、三司官座喜味親方の引退(排斥)を画策の密命を与え、琉球行きを命じます。

米人(ペリー)の首里城入城を拒絶せんとしたこと、水兵の溺死(撲殺)事件、英仏人の冷遇、大湾事件などをその失政としてあげつらいながら、その三司官辞職を迫っていったのです。そして)十一月三日、摂政大里王子、座喜味を除く三司官の池城、小禄に、玉川王子、豊見城按司、恩河親方、そして仮日帳主取となった大湾らを宿館に招き、市来は斉彬の内命を伝えます。

こうした薩摩派を加えて、市来は座喜味三司官の罷免とともに、斉彬の内命ハカ条を示したのでした。

- ◇英・仏・米の三国に薩琉の留学生を派遣する(薩摩から六人、琉球から三人)が、公儀に対してはばかりもあれば、薩摩学生もすべて琉装する。
- ◇蒸気船を琉球名義で買い入れること。
- ◇琉球・大島で外国貿易を始めること(外国とは当面オランダ、フランス)。
- ◇台湾に琉球船の停泊港を設け、貿易を開くこと。
- ◇福建の琉球館を拡充し貿易を盛んにすること。
- ◇薩摩商人を琉装させて福州で商売をおこなわせること。
- ◇他

これらを異議なく受け、国王へ上申し、受諾書を提出せよ、と命じたのです。

年明けて、咸豊八年(安政五年、一八五八)一。島津斉彬は一月二十日、琉球にいる市来に対して、当面の指示をします。フランスから購入する軍艦・商船は、まず軍艦から先にし、大砲小銃も同時に注文すること、代金のことは在番奉行所の誰それに通知すること、外人の航海指南を招くこと、琉球に滞在する外人を厚遇すること、座喜味親方は引退させること——などです。

二月十七日、市来は琉装して、「トカラ島医者伊知良親雲上」と名乗って、大湾とともに仏人らを訪問。軍艦購入・留学生派遣・貿易開始などでの交渉をおこないます。ジラルールら仏人は喜んで、香港のフランス領事に斡旋して、その実現を期すことを約束します。

大老井伊直弼が一橋慶喜をしりぞけて紀州慶福を将軍後嗣にしたことに、幕政改革を望んでいた人々は失望、斉彬も怒って、幕府を諫めるべく、三千の精鋭を率いて、上洛しようとしていたのです。朝、気分がすぐれぬと言っていたが、訓練終了までこれを見守りました。しかし、翌九日から発熱し、下痢も起こし、十日は熱・下痢ともにひどくなり、それは数日にわたり、気力もおとろえ、十五日には重篤となり、翌十六日には斉彬は亡くなりました。50歳でした。

琉球側の軍艦・大砲・銃剣等の購入契約書ができたのは、七月二十六日。署名は「琉球国中山府総理大臣 尚 景保・布政大夫馬克承」です。八月二日、「トカラ島医師」伊知良親雲上こと市来正右衛門、恩河親方、牧志親雲上らが久米松尾山の仏人ジラルールと会見、漢文・仏文の契約書を交わしました。軍艦は、六十尺あるいは四、五十尺以上の大船。三百四、五十馬力。大砲大小二十門、六十斤砲弾二十個、二十四斤弾五、六百個。銃剣銃一千挺、小鳥銃百挺、銃弾は一挺につき五百発……。船の代金は、日本の金で約十八万五千両、六年分割。さらに当面の技術指導として外国人(仏人)に乗り込んで貰うが、給与は二千五百両、雑費五千両。来年(咸豊九年・安政六年、一八五九)三月までには、一切の注文品到着——という約束を取り交わし、市来はこの旨、八月九日付で、斉彬に稟報したのでした。ところが……その鹿児島では、すでに、斉彬が急死していたのです。

まもなく、鹿児島から斉彬逝去の報が琉球に届き、衝撃が走ります。斉彬の死によって、反斉彬派の島津将曹らが息を吹き返し、ついには、斉彬の壮大な計画をすべて中止させ、いわゆる「斉彬崩れ」が始まるのでした。むろん、琉球を通したフランス軍艦・大砲購入なども止めさせられました。斉彬特使の市来に対しては斉彬の密命をすべて破棄して、帰国せよとの命令がきました。市来はもとより、その指示で、琉球の名義でもってフランス側と契約をおこなった王府も、窮地に陥りました。しかし、軍艦購入などは、仏人を通して香港のフランス領事に通じ、正式に契約を交わしていたのです。早急に、契約解除の交渉をしなければなりません、計画がここまで進んでしまった以上、仏人が受け入れるかどうか、受け入れたとしても、相当の違約金を取られるはずで。

市来は腹を切って、仏人に謝罪せんとしましたが、皆がこれを止め、一つの計略を見いだします。発注責任者の「トカラ島医師」伊知良親雲上(市来)が落馬して死んでしまったことにし、これにより、代金調達の道が閉ざされたために、契約を破棄してほしい、もしくは代わりの購入者を見つけるまで猶予して貰いたい、というものです。摂政、三司官、交渉官らは松尾山の仏人を訪ね、牧志が中心となって説得、約五時間ほどもかかって交渉し、ようやく違約金一万ドルを支払って、契約解除にこぎつけ、契約書を取り返しました。これが九月十四日のことです。どこかで、ひょっこり仏人たちが市来の姿を見かけてしまったり、確かめに来たりするとコトなので、市来は姿を変えて身を潜ませ、波上興斉寺の丘には「伊知良親雲上之墓」まで建てた念の入れようでした。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛 18  
2019/8/27

# 沖縄県の設置の年表

| 和暦    | 西暦           | 出来事       | 説明                                                                                      |
|-------|--------------|-----------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 明治2年  | 1869年7月25日   | 版籍奉還      | 薩摩藩が鹿児島藩と名称を変更、薩摩、大隅、日向、琉球は鹿児島藩の管轄になる。                                                  |
| 明治4年  | 1871年8月29日   | 廃藩置県      | 琉球王国の領土は鹿児島県の管轄となる。                                                                     |
| 明治4年  | 1871年9月13日   | 日清修好条規    | 日本と清の間で結ばれた条約。日本側大使は大蔵卿伊達宗城、清側大使は直隸総督李鴻章                                                |
| 明治4年  | 1871年10月18日  | 宮古島島民遭難事件 | 宮古島の年貢線が台湾近海で遭難し、台湾原住民によって殺害された。                                                        |
| 明治5年  | 1872年10月16日  | 維新慶賀使     | 琉球国王（尚泰王）天皇から冊封を受け琉球藩王に。琉球王国は廃止し琉球藩を設置。                                                 |
| 明治6年  | 1873年1月      |           | 琉球藩の事務が外務省から内務省に移管。                                                                     |
| 明治7年  | 1874年5月6日-6月 | 台湾出兵      | 西郷従道が征台を強行。3650名。征韓論に敗れて鹿児島に戻っていた西郷隆盛が募集して送った。                                          |
| 明治7年  | 1874年10月31日  | 日清両国互換条約  | 清が日本軍の出兵を保民の義挙と認め、遭難民に対する撫恤金（見舞金）10万両（テール）、戦費賠償金40万両[注釈3]の計50万両を日本側に支払い、生蕃取締を保証する       |
| 明治8年  | 1875年7月14日   | 清国から切り離し令 | 政府は琉球藩に松田を派遣し、太政官令にて清国からの冊封と清国への慶賀使を差し止めを命ずる。<br>別途（福州琉球館の廃止、征台謝恩のための藩王の上京、鎮台（軍隊）分営の設置） |
| 明治11年 | 1878年12月27日  | 琉球処分官任命   | 政府、外交問題の大事を避けるため、琉球処分の決行を決め、松田道之を処分官に任命                                                 |
| 明治12年 | 1879年3月27日   | 廃藩置県      | 首里城にて太政官令読み上げ「琉球藩を廃止沖縄県を置く。県庁は首里に置く」                                                    |
| 明治13年 | 1880年3月      | 分島増約案     | 宮古八重山を中国領土とし、日清修好条規に日本が中国内で欧米並みの商業活動が出来るよう条約を追加                                         |
| 明治13年 | 1880年8月      | 分島増約案合意   | 北京で正式交渉し合意                                                                              |
| 明治13年 | 1880年11月     | 林世功自決     | 琉球を救うように清国政府に嘆願書を提出し、自らの命をたつた。福建総督にいわれた「琉球のためにどれだけの者が生命をかけたか」という言葉が重くのしかかっていたからである。     |
| 明治27年 | 1894年7月25日   | 日清戦争      | 朝鮮半島の東学党の乱をきっかけに日清両国で宣戦布告                                                               |
| 明治28年 | 1895年4月17日   | 下関条約      | 遼東半島、台湾、澎湖諸島などを割譲。賠償金2億テール（当時の国家予算の4倍）                                                  |

# 沖縄県の設置の年表

沖縄県が設置されても清はこれを認めず、前米大統領のグラントに問題の調停を依頼した。日本は中国大陸の資源に目を向けた方がよいというグラントの助言を組み入れ、宮古・八重山を中国領土とするかわりに、日本が中国内部で欧米並みの商業活動をできる条文を追加する「分島・増約案」を李鴻章に提示した。旧国王尚泰を八重山に渡すことも考えていた。李鴻章は「琉球三分割案」を提示したが日本が即座に拒否したため、日本案をもとに交渉し、1880年（明治13年）日清間で合意した。ところが調印の段階になると清国は、国内経済の混乱を招くのではないかと恐れ、さらに琉球の亡命者から日本の帰属への反対の請願が再三にわたり届けられたりして事で調印は棚上げにされた。その後日清戦争の日本の勝利で台湾が分譲されると清国は琉球の領有を主張しなくなった。

## 日清間で日本案を合意



一般社団法人

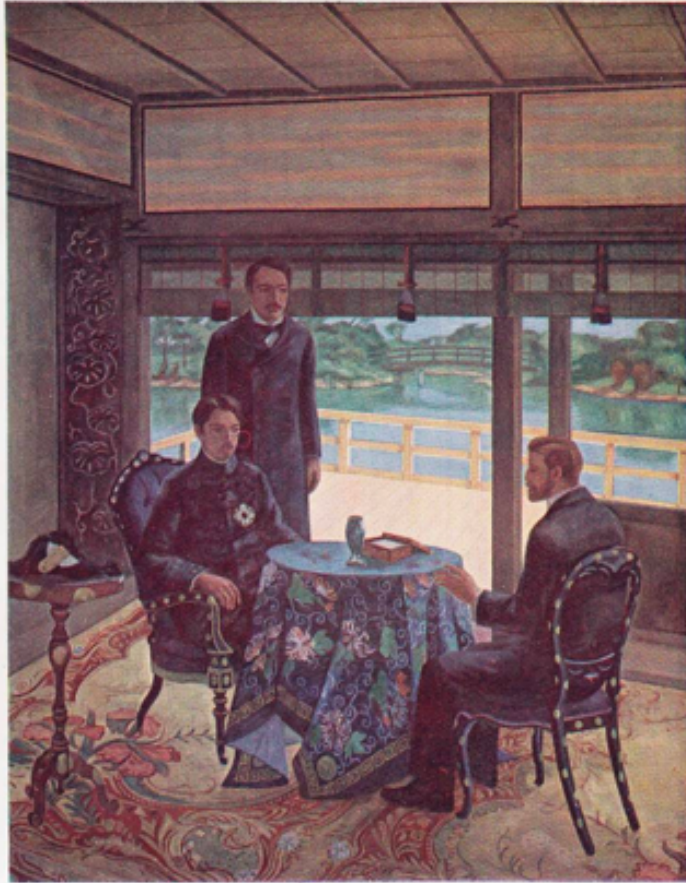
日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛 19  
2019/8/27



# 分島問題とグラント元大統領の来日

明治神宮外苑記念館蔵 皇座 畫



【41】

大久保作次郎 著 ラグ トン 軍 將 ト 御 話 子 説 譯 一 奉 納  
明治二十年八月十九日 皇座御座 蔵 館 中 宮 神 明

「アメリカ南北戦争で勇名をはせ、戦後は大統領を二期つとめたユリシーズ・シン プ ソ ン ・ グ ラ ン ト 将 軍 (Ulysses Simpson Grant, 1822-85) は、一八七七 (明治十) 年五月から世界漫遊の旅にのぼり、一八七九 (明治十二) 年六月長崎に着いた。ついで東京に行き、日光や箱根などで約二ヵ月半滞在したが、グラントに随行した書記の J・R・ヤングは、自ら見聞した日本の世相・風俗・風物・文化などをスケッチするかたわら、グラントと天皇との会見記、当時の日本が直面していた政治問題などを論じている。国賓として厚く遇されることになったグラント将軍は、長崎・横浜で大歓迎をうけ、東京へは別仕立の列車が用意され、群衆は至るところ日米両国旗をふり、歓呼の声をもって彼を迎えた。七月四日はちょうどアメリカ独立記念日にあたっていたが、この日グラントは皇居で天皇に謁見した。太政大臣や顯官が列席しており、会見は厳粛に行なわれたが、このときの模様は本文に詳しく描かれている。

八月十日には、天皇と将軍との頂上会談が浜離宮内の中島の茶屋で行なわれ、このとき代議政体の採用・条約改正・国債・教育・琉球問題などについて約二時間話し合われた。ことに琉球に関しては、この年の四月、日本政府が廃藩置県を断行して、沖縄県を設けたために駐日清国公使・何如璋より承認できない旨の抗議をうけ、清国との間に係争が起こり、政府はこの問題解決に苦慮していた。が、グラント将軍は互譲の精神をもって、友好的に解決するよう勧めた。(グラント将軍日本訪問記 訳者の言葉 PI)

グラント将軍は、東京に着いた時、清国政府から伝言を得ていることをすでに日本側に伝えてあり、できれば両国間の問題に立ち入らずに、日本政府にそれを正式に伝えたいと思っていた。天皇は内務卿の伊藤〔伊藤博文〕と陸軍卿の西郷将軍〔西郷従道〕を遣わして、その声明書を受け取らせることにした。伊藤氏は、日本の立場をこまかく話し、日本は昔から琉球に対して主権を有していると主張し、問題のすべてを入念に検討した。伊藤氏の話が終わると、グラント将軍は、前々から日本政府とこの件について話し合いたいと思っていた、と言った。願いが成就すれば、恭親王や直隸総督の李鴻章との約束を果たしたことになるからである。グラント将軍は清国の立場をよく研究してみた。大きな関心を持って日本側の主張にも耳を傾けてみた。論争の是非については何もいえなかった。日清両国の立場には、歴史的に多くの問題を内包しており、それは綿密な調査研究によってのみ解決できるとグラントは語った。

(中略)

もし日清の間に戦争が起これば、欧州列強国は自分たちのやり方で、自分たちには利益をもたらし、日清両国には不利益となるように、戦争を終わらせることであろう。「貴国の弱さと日清両国のけんかが、列強につけ入るすきを与えているのです。琉球問題は非友好的な外交にとって、嘴を入れる願ってもない機会であります」とグラント将軍は言った。「これらは考慮すべき重大な問題であります、昔からの権利を主張している日本としては、ただわが国の領土に対して支配権をふるってきただけのことなのです」と伊藤内務卿は言った。「話はここまでこじれているのに、日本はどのように事態を收拾しようというのか、私にはわかりません」とグラント将軍は答えた。しかし、清国側を得心させ、同時に日本の権利を犯さなくてもすむような何らかの方策があるかもしれないのである。(「グラント将軍日本訪問記」PI23～PI25)



# 島津家歴代当主

| 島津氏歴代当主 |      |           |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---------|------|-----------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1       | 島津忠久 | 1180-1227 | 薩摩・大隅・日向・越前などの守護。島津荘より島津を称す。在鎌倉。                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 2       | 島津忠時 | 1227-1265 | 初名は「忠義」。薩摩守護。鎌倉将軍の近侍として仕える。                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| 3       | 島津久経 | 1265-1284 | 初名は「久時」。薩摩守護。島津氏で初めて薩摩に入国する。元寇で活躍。                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 4       | 島津忠宗 | 1284-1318 | 薩摩守護。島津氏の薩摩入部を進める。                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 5       | 島津貞久 | 1318-1363 | 薩摩・大隅・日向守護。足利尊氏に属し活躍。三州守護職を回復する。                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 6       | 島津師久 | 1363-1376 | 薩摩守護。貞久3男。兄系島津氏（総州家）の初代。                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| 6       | 島津氏久 | 1363-1387 | 大隅・日向・筑後守護。貞久4男。弟系島津氏（奥州家）の初代。                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 7       | 島津伊久 | 1376-1404 | 薩摩守護。師久長男。兄系島津氏（総州家）2代。重代の家宝を元元に譲る。                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 7       | 島津元久 | 1387-1411 | 初名は「孝久」。薩摩・大隅・日向守護。氏久長男。弟系島津氏（奥州家）2代。家督を統一する。                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 8       | 島津久豊 | 1411-1425 | 薩摩・大隅・日向守護。氏久次男。島津氏の守護大名化を確立させる。                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 9       | 島津忠国 | 1425-1470 | 初名は「貴久」。薩摩・大隅・日向守護。島津氏を守護大名として安定させる。                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 10      | 島津立久 | 1470-1474 | 薩摩・大隅・日向守護。応仁の乱では東軍に属す。                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| 11      | 島津忠昌 | 1474-1508 | 初名は「武久」薩摩・大隅・日向守護。学問を好むが、国内騒乱を病んで自害。                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 12      | 島津忠治 | 1508-1515 | 薩摩・大隅・日向守護。忠昌長男。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 13      | 島津忠隆 | 1515-1519 | 薩摩・大隅・日向守護。忠昌次男。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 14      | 島津勝久 | 1519-1526 | 初名は「忠兼」。薩摩・大隅・日向守護。忠昌3男。薩摩守実久の横暴に苦しむ。後に豊後国へ逃亡。同地で客死。                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 15      | 島津貴久 | 1526-1566 | 薩摩・大隅・日向守護。勝久の養子。島津忠良の嫡子。9代忠国の玄孫。争乱の薩摩を統一する。                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 16      | 島津義久 | 1566-1587 | 初名は「忠良」・「義良」。薩摩・大隅・日向守護。貴久の嫡男。三州を統一し、一時九州統一目前に迫るなど島津氏の全盛期を築く。                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 17      | 島津義弘 | 1587-1602 | 初名は「忠平」・「義珍」。肥後守護代。貴久の次男。家督を継いでないとしてが、「尚古集成館」では17代としている（後述）[9]。                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 18      | 島津家久 | 1602-1638 | 初名は「忠恒」。初代鹿児島藩主。義久の養子。義弘3男。鹿児島城を築く。                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| 19      | 島津光久 | 1638-1687 | 初名は「忠元」。2代鹿児島藩主。鹿児島に仙巖園を造園する。                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 20      | 島津綱貴 | 1687-1704 | 初名は「延久」。3代鹿児島藩主。島津綱久の嫡男。光久の嫡孫。                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| 21      | 島津古貴 | 1704-1721 | 初名は「忠竹」。4代鹿児島藩主。霧島神宮の社殿を造営する。                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| 22      | 島津繼豊 | 1721-1746 | 初名は「忠休」。5代鹿児島藩主。徳川綱吉の養女・竹姫を娶り、江戸將軍家と縁戚関係になる。                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| 22      | 島津宗信 | 1746-1749 | 初名は「忠顕」。6代鹿児島藩主。繼豊の長男。                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| 24      | 島津重年 | 1749-1755 | 宝暦5年（1755年）に幕命により、木曾三川の治水工事（宝暦治水）を命じられ、家老の平田郷負を総責任者として多数の藩士が工事に従事したが、莫大な費用と殉職者80数名を出した。                                                                                                                                                                                                                                         |
| 25      | 島津重豪 | 1755-1787 | 蘭学に大変な興味を示し、自ら長崎のオランダ商館に向かい、オランダ船に搭乗したりしている。老いてますます盛んな重豪は、曾孫の島津斉彬の才能を高く評価し、斉彬と共にシーボルトと会見し、当時の西洋の情勢を聞いていた。なお重豪は斉彬の利発さを愛し、幼少から暫くの間一緒に暮らし、入浴も一緒にしたほど斉彬を可愛がった。ちなみに重豪は、ローマ字を書き、オランダ語を話すこともできたといわれている。会見したシーボルトは、「重豪公は80余歳と聞いていたが、どう見ても60歳前後しか見えない。開明的で聡明な君主だ」と述べている。                                                                 |
| 26      | 島津斉宣 | 1787-1809 | 実権は父・重豪に掌握されていた。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 27      | 島津斉興 | 1809-1851 | 調所広郷を重用して、財政改革を主とした藩政改革に取り組んだ。藩政改革では調所主導の元、借金250万分割支払いや清との密貿易、砂糖の専売、偽金作りなどが大いに効果を現わし、薩摩藩の財政は一気に回復した。しかし嘉永元年（1848年）幕府から密貿易の件で咎められ、責任者の調所は12月に急死した。                                                                                                                                                                               |
| 28      | 島津斉彬 | 1851-1858 | 藩主に就任するや、藩の富国強兵に努め、洋式造船、反射炉・溶鉱炉の建設、地雷・水雷・ガラス・ガス灯の製造などの集成館事業を興した。洋式帆船「いろは丸」を完成させ、帆船用帆布を自製するために木綿紡績事業を興した。西洋式軍艦「昇平丸」を建造し幕府に献上している。昇平丸は後に蝦夷地開拓の際に咸臨丸とともに大きく役立った。黒船来航以前から蒸気機関の国産化を試み、日本最初の国産蒸気船「雲行丸」として結実させた。また、下士階級出身の西郷隆盛や大久保利通を登用して朝廷での政局に関わる。                                                                                   |
| 29      | 島津忠義 | 1858-1897 | 15代将軍・徳川慶喜が大政奉還した後、西郷隆盛・大久保利通・小松带刀らの進言を容れ、薩摩藩兵3千を率いて上洛した。そして王政復古の大号令に貢献し、議定に任せられて小御所會議に参席した。慶喜が発した討薩の表に於いて敵し糾弾されるが、島羽・伏見の戦いでは薩長軍が大勝利を納めた。この直後、海陸軍総督に任命されるが西郷の進言に従い1日を辞任している。明治維新後は長州・土佐・肥前の3藩と協力して版籍奉還を進んで行なう。その後、名を「忠義」と改め薩摩藩知事となるが、実質的な藩政は西郷に任せていたと言われている。明治4年（1871年）の廃藩置県後は、公爵となった。以後、政府の命により東京に在住する。西南戦争時も東京に留まり、ほぼ関与らなかった。 |

## ＜第一尚氏王統＞

尚巴志王(1422年-1439年)→尚思紹王(1406年 - 1421年)→尚忠王(1440年 - 1444年)  
→尚思達王( 1445年-1449年)→尚金福王( 1450年-1453年)→尚泰久王( 1454年-1460年)  
→尚徳王( 1461年-1469年)

| 第二尚氏王統 |      |             |                                                                                                                                                                                                                     |
|--------|------|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1      | 尚円王  | 1469年-1476年 | 第7代琉球国王。クーデタで第一尚氏王統を倒し、第二尚氏王統の初代国王（在位：1469年 - 1476年）となった。即位以前の名は金丸（かなまる）、童名は思徳金（うみとくがね）と言った。                                                                                                                        |
| 2      | 尚宣威王 | 1477年       | 尚円王が1476年（成化12年）に薨去すると、翌年、世子・尚真がまだ幼いということもあって群臣の推挙により即位した。しかし、その年の2月、陽神キミテズリが出現して、その神託によってわずか半年で退位した。                                                                                                               |
| 3      | 尚真王  | 1477年-1527年 | 中央集権体制を確立し、第二尚氏王統の権力基盤を安定させた。                                                                                                                                                                                       |
| 4      | 尚清王  | 1527年-1555年 | 1537年には奄美大島で起こった与湾大親による反乱を鎮圧し、同時に倭寇に対する圧力、防備も強化するなど軍事面で大きな功績を挙げた。                                                                                                                                                   |
| 5      | 尚元王  | 1556年-1572年 | 薩摩の島津貴久とは良好な関係を保持するため、積極的に島津氏からの使者を歓迎したが、1570年と1572年の2度にわたって、島津氏の使者として派遣された僧侶・雪岑との間に接待で非礼があったと言うことから問題を起こし、それが原因で1571年には王自らが奄美大島へ親征するという事態も発生している。                                                                  |
| 6      | 尚永王  | 1573年-1588年 | 政務に特に見るべきところもなく、1589年1月11日（万暦16年11月25日）に30歳の若さで早世した。                                                                                                                                                                |
| 7      | 尚寧王  | 1589年-1620年 | 1609年（万暦37年、慶長14年）に薩摩藩の島津氏に侵攻され、降伏した。尚寧王は薩摩藩によって江戸に連行され、征夷大將軍の徳川秀忠に謁見、後に琉球に戻った。                                                                                                                                     |
| 8      | 尚豊王  | 1621年-1640年 | 1636年（崇禎9年）、琉球国王の王号を薩摩藩から剥奪され、琉球国司を名乗る。                                                                                                                                                                             |
| 9      | 尚賢王  | 1641年-1647年 | 生誕時から薩摩で育つ。しかし、17歳で即位後、「遠見番」をつくり、烽火の制を定めた。また、黒糖、 <b>ウコン</b> の専売制はこの時代に始まった。                                                                                                                                         |
| 10     | 尚賢王  | 1648年-1668年 | 羽地朝秀を摂政とし、多くの改革を行なった。また、羽地朝秀は尚賢王の代に琉球最古の歴史書である「中山世鑑」を編集している。                                                                                                                                                        |
| 11     | 尚貞王  | 1669年-1709年 | 尚貞王のときに <b>蔡鏐</b> （蔡温の父）が <b>中山世譜</b> を編集した。在世中に <b>御茶屋御殿</b> (首里、崎山)を建造した。                                                                                                                                         |
| 12     | 尚益王  | 1710年-1712年 | 祖父・尚貞王代に魏士哲・高嶺徳明が中国に渡り補脣術を学んだが、それは王孫・尚益が兎唇であったためらしい。伝承では、尚益は口髭を生やして傷を隠したため、その子らも父が兎唇であった事を知らなかったと伝えられる。                                                                                                             |
| 13     | 尚敬王  | 1713年-1751年 | 蔡温を三司官にして多くの改革を行った。また教育や文化振興に力を入れ、琉球を文化大国へ導くなどその手腕は近世の名君ととうたわれた。1712年（康熙51年）、薩摩藩から許され、琉球国司から琉球国王の王号に復した。                                                                                                            |
| 14     | 尚穆王  | 1752年-1794年 | 寝廟御殿を創建。また、このころ琉球科律完成。さらに、喪章制度を整備し、国民の模範となるものに物品や役職を授けた。                                                                                                                                                            |
| 15     | 尚温王  | 1795年-1802年 | 1798年に国学（現沖縄県立首里高等学校）、平等学校を開く                                                                                                                                                                                       |
| 16     | 尚成王  | 1803年       | 2歳で即位するが、わずか1年足らずで死去。                                                                                                                                                                                               |
| 17     | 尚灝王  | 1804年-1834年 | 宮古・八重山方面への派遣医師の増員のほか、琉球の刑法典である『琉球科律』を追補する『新集科律』の編纂事業があった。1816年には、バジル・ホールが来航している。                                                                                                                                    |
| 18     | 尚育王  | 1835年-1847年 | 在位中、1844年（道光24年）、フランス海軍が那覇へ来航すると、フランス側の要求で貿易と宣教師テオドル＝オギュスタン・フォルカードを滞在させて布教するのを許可した。1846年（道光26年）、フランスから開国を迫られ、入港を許可し、フランス海軍はフォルカードを伴い、帰国したという。同年、英国海軍が入港し、宣教師ベッテルハイムが逗留した。翌1847年（道光27年）、キリスト教の宣教師が滞在していたことを薩摩藩に報告した。 |
| 19     | 尚泰王  | 1848年-1872年 | 1853年（咸豐3年）にはペリーが琉球に来航し、翌1854年に琉米修好条約を締結した。さらに、1855年には琉仏修好条約、1859年には琉蘭修好条約を結んだ。1872年（同治11年、明治5年）に、日本は琉球国王尚泰を琉球藩王に封じて華族とし、東京に藩邸を与え、のち華族令の発令に伴って尚泰は侯爵となった。1901年（明治34年）に急性胃腸カタルのため59歳で没                                |



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛  
2019/8/27

# 江戸の藩の石高ランキング

(文久3年幕府大目付調べ)

| 順位 | 国名 | 藩名  | 石高       | 初代藩主          | 初代藩主の父 | 文久3年の藩主       | 藩格 |
|----|----|-----|----------|---------------|--------|---------------|----|
| 1  | 加賀 | 金沢  | 120万石    | 前田従三位中納言利長    | 前田利家   | 前田正二位権中納言齊泰   | 外様 |
| 2  | 薩摩 | 鹿児島 | 72万8000石 | 島津従三位中納言家久    | 島津義弘   | 島津修理大夫忠義      | 外様 |
| 3  | 陸奥 | 仙台  | 62万石     | 伊達権中納言政宗      | 伊達輝宗   | 伊達左中将慶邦       | 外様 |
| 4  | 尾張 | 名古屋 | 61万9500石 | 徳川従二位権中納言義直   | 徳川家康   | 徳川義宣          | 三家 |
| 5  | 紀伊 | 和歌山 | 55万6000石 | 徳川従二位権中納言頼宣   | 徳川家康   | 徳川茂承          | 三家 |
| 6  | 肥後 | 熊本  | 54万石     | 細川従三位参議忠興     | 細川藤孝   | 細川正四位下左中将     | 外様 |
| 7  | 筑前 | 福岡  | 47万3000石 | 黒田従四位下筑前守長政   | 黒田孝高   | 黒田従二位左中将長博    | 外様 |
| 8  | 安芸 | 広島  | 42万6000石 | 浅野従四位下紀伊守幸長   | 浅野長政   | 浅野従四位下左少将長訓   | 外様 |
| 9  | 長門 | 萩   | 36万石     | 毛利従三位権中納言輝元   | 毛利隆元   | 毛利従二位権中納言敬親   | 外様 |
| 10 | 肥前 | 佐賀  | 35万7000石 | 鍋島従四位下侍従勝茂    | 鍋島直茂   | 鍋島従一位肥前守直大    | 外様 |
| 11 | 常陸 | 水戸  | 35万石     | 徳川正三位権中納言頼房   | 徳川家康   | 徳川従三位権中納言慶篤   | 三家 |
| 12 | 伊勢 | 津   | 32万3900石 | 藤堂従四位下侍従高虎    | 藤堂虎高   | 藤堂和泉守高猷       | 外様 |
| 13 | 越前 | 福井  | 32万石     | 松平正四位下参議忠昌    | 結城秀康   | 松平従五位下肥前守茂昭   | 親藩 |
| 13 | 因幡 | 鳥取  | 32万石     | 池田従四位下侍従忠継    | 池田輝政   | 池田左中将慶徳       | 外様 |
| 15 | 備前 | 岡山  | 31万5000石 | 池田正四位下参議輝政    | 池田恒興   | 池田従四位下左中将茂政   | 外様 |
| 16 | 陸奥 | 会津  | 28万石     | 保科正四位下肥後守正之   | 徳川秀忠   | 松平従四位下侍従容保    | 親藩 |
| 17 | 阿波 | 徳島  | 25万7000石 | 蜂須賀従四位下阿波守至鎮  | 蜂須賀家政  | 蜂須賀従四位下阿波守齊裕  | 外様 |
| 18 | 土佐 | 高知  | 24万石     | 山内従四位下土佐守一豊   | 山内盛豊   | 山内土佐守豊範       | 外様 |
| 19 | 近江 | 彦根  | 23万石     | 井伊正四位上左中将直孝   | 井伊直政   | 井伊掃部頭直憲       | 譜代 |
| 20 | 筑後 | 久留米 | 21万石     | 有馬従四位下侍従豊氏    | 有馬則頼   | 有馬左中将頼成       | 外様 |
| 21 | 出羽 | 久保田 | 20万5000石 | 佐竹右京大夫義宣      | 佐竹義重   | 佐竹義典          | 外様 |
| 22 | 陸奥 | 盛岡  | 20万石(格)  | 南部従四位下信濃守利直   | 南部信直   | 南部正三位美濃守利剛    | 外様 |
| 23 | 出雲 | 松江  | 18万6000石 | 松平従四位上出羽守直政   | 結城秀康   | 松平従四位上権少将定安   | 親藩 |
| 24 | 武蔵 | 川越  | 17万石     | 松平従四位下大和守直基   | 結城秀康   | 松平従四位下権少将直克   | 親藩 |
| 25 | 出羽 | 鶴岡  | 16万7000石 | 酒井左衛門尉家次      | 酒井忠次   | 酒井従四位下左衛門尉忠篤  | 譜代 |
| 26 | 大和 | 郡山  | 15万1200石 | 柳沢従四位下侍従吉保    | 柳沢安忠   | 柳沢従四位下侍従保申    | 譜代 |
| 27 | 伊予 | 松山  | 15万石     | 松平従五位下隠岐守定勝   | 久松俊勝   | 松平勝成          | 親藩 |
| 27 | 豊前 | 小倉  | 15万石     | 小笠原従五位下兵部大輔秀政 | 小笠原真慶  | 小笠原従四位下大膳大夫忠晴 | 譜代 |
| 27 | 播磨 | 姫路  | 15万石     | 酒井河内守重忠       | 酒井正親   | 酒井侍従忠頼        | 譜代 |
| 27 | 越後 | 高田  | 15万石     | 榊原式部大輔康政      | 榊原長政   | 榊原式部大輔政敬      | 譜代 |
| 27 | 出羽 | 米沢  | 15万石     | 上杉従三位権中納言景勝   | 長尾景景   | 上杉侍従齊憲        | 外様 |
| 32 | 讃岐 | 高松  | 12万石     | 松平従四位上讃岐守頼重   | 徳川頼房   | 松平従四位上権少将頼聡   | 親藩 |
| 33 | 相模 | 小田原 | 11万3000石 | 大久保相模守忠勝      | 大久保忠世  | 大久保従四位下加賀守忠礼  | 譜代 |
| 34 | 伊勢 | 桑名  | 11万石     | 松平従五位下越中守定綱   | 松平定勝   | 松平越中守定敬       | 親藩 |
| 34 | 備後 | 福山  | 11万石     | 阿部備中守正次       | 阿部正勝   | 阿部主計頭正方       | 譜代 |

| 順位 | 国名 | 藩名  | 石高       | 初代藩主          | 初代藩主の父    | 文久3年の藩主       | 藩格 |
|----|----|-----|----------|---------------|-----------|---------------|----|
| 1  | 加賀 | 金沢  | 120万石    | 前田従三位中納言利長    | 前田利家      | 前田正二位権中納言齊泰   | 外様 |
| 2  | 陸奥 | 仙台  | 62万石     | 伊達権中納言政宗      | 伊達輝宗      | 伊達左中将慶邦       | 外様 |
| 3  | 尾張 | 名古屋 | 61万9500石 | 徳川従二位権中納言義直   | 徳川家康      | 徳川義宣          | 三家 |
| 4  | 薩摩 | 鹿児島 | 80万4000石 | 島津従三位中納言家久    | 島津義弘      | 島津修理大夫忠義      | 外様 |
| 5  | 紀伊 | 和歌山 | 55万6000石 | 徳川従二位権中納言頼宣   | 徳川家康      | 徳川茂承          | 三家 |
| 6  | 肥後 | 熊本  | 54万石     | 細川従三位参議忠興     | 細川藤孝      | 細川正四位下左中将     | 外様 |
| 7  | 筑前 | 福岡  | 47万3000石 | 黒田従四位下筑前守長政   | 黒田孝高      | 黒田従二位左中将長博    | 外様 |
| 8  | 安芸 | 広島  | 42万6000石 | 浅野従四位下紀伊守幸長   | 浅野長政      | 浅野従四位下左少将長訓   | 外様 |
| 9  | 長門 | 萩   | 36万石     | 毛利従三位権中納言輝元   | 毛利隆元      | 毛利従二位権中納言敬親   | 外様 |
| 10 | 肥前 | 佐賀  | 35万7000石 | 鍋島従四位下侍従勝茂    | 鍋島直茂      | 鍋島従一位肥前守直大    | 外様 |
| 11 | 常陸 | 水戸  | 35万石     | 徳川正三位権中納言頼房   | 徳川家康      | 徳川従三位権中納言慶篤   | 三家 |
| 12 | 伊勢 | 津   | 32万3900石 | 藤堂従四位下侍従高虎    | 藤堂虎高      | 藤堂和泉守高猷       | 外様 |
| 13 | 越前 | 福井  | 32万石     | 松平正四位下参議忠昌    | 結城秀康      | 松平従五位下肥前守茂昭   | 親藩 |
| 13 | 因幡 | 鳥取  | 32万石     | 池田従四位下侍従忠継    | 池田輝政      | 池田左中将慶徳       | 外様 |
| 15 | 備前 | 岡山  | 31万5000石 | 池田正四位下参議輝政    | 池田恒興      | 池田従四位下左中将茂政   | 外様 |
| 16 | 陸奥 | 会津  | 28万石     | 保科正四位下肥後守正之   | 徳川秀忠      | 松平従四位下侍従容保    | 親藩 |
| 17 | 阿波 | 徳島  | 25万7000石 | 蜂須賀従四位下阿波守至鎮  | 蜂須賀家政     | 蜂須賀従四位下阿波守齊裕  | 外様 |
| 18 | 土佐 | 高知  | 24万石     | 山内従四位下土佐守一豊   | 山内盛豊      | 山内土佐守豊範       | 外様 |
| 19 | 近江 | 彦根  | 23万石     | 井伊正四位上左中将直孝   | 井伊直政      | 井伊掃部頭直憲       | 譜代 |
| 20 | 筑後 | 久留米 | 21万石     | 有馬従四位下侍従豊氏    | 有馬則頼      | 有馬左中将頼成       | 外様 |
| 21 | 出羽 | 久保田 | 20万5000石 | 佐竹右京大夫義宣      | 佐竹義重      | 佐竹義典          | 外様 |
| 22 | 陸奥 | 盛岡  | 20万石(格)  | 南部従四位下信濃守利直   | 南部信直      | 南部正三位美濃守利剛    | 外様 |
| 23 | 出雲 | 松江  | 18万6000石 | 松平従四位上出羽守直政   | 結城秀康      | 松平従四位上権少将定安   | 親藩 |
| 24 | 武蔵 | 川越  | 17万石     | 松平従四位下大和守直基   | 結城秀康      | 松平従四位下権少将直克   | 親藩 |
| 25 | 出羽 | 鶴岡  | 16万7000石 | 酒井左衛門尉家次      | 酒井忠次      | 酒井従四位下左衛門尉忠篤  | 譜代 |
| 26 | 大和 | 郡山  | 15万1200石 | 柳沢従四位下侍従吉保    | 柳沢安忠      | 柳沢従四位下侍従保申    | 譜代 |
| 27 | 伊予 | 松山  | 15万石     | 松平従五位下隠岐守定勝   | 久松俊勝      | 松平勝成          | 親藩 |
| 27 | 豊前 | 小倉  | 15万石     | 小笠原従五位下兵部大輔秀政 | 小笠原真慶     | 小笠原従四位下大膳大夫忠晴 | 譜代 |
| 27 | 播磨 | 姫路  | 15万石     | 酒井河内守重忠       | 酒井正親      | 酒井侍従忠頼        | 譜代 |
| 27 | 越後 | 高田  | 15万石     | 榊原式部大輔康政      | 榊原長政      | 榊原式部大輔政敬      | 譜代 |
| 27 | 出羽 | 米沢  | 15万石     | 上杉従三位権中納言景勝   | 長尾景景      | 上杉侍従齊憲        | 外様 |
| 32 | 琉球 | 琉球  | 12万4000  | 尚円王           | 尚履(しょうりよ) | 尚崇王           | ?  |
| 33 | 讃岐 | 高松  | 12万石     | 松平従四位上讃岐守頼重   | 徳川頼房      | 松平従四位上権少将頼聡   | 親藩 |
| 34 | 相模 | 小田原 | 11万3000石 | 大久保相模守忠勝      | 大久保忠世     | 大久保従四位下加賀守忠礼  | 譜代 |
| 35 | 伊勢 | 桑名  | 11万石     | 松平従五位下越中守定綱   | 松平定勝      | 松平越中守定敬       | 親藩 |
| 35 | 備後 | 福山  | 11万石     | 阿部備中守正次       | 阿部正勝      | 阿部主計頭正方       | 譜代 |



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム  
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛  
2019/8/27